

希望者が一律に発表する従来の形態から、分科会毎にテーマを定め議論を集中させる形態に変更する方針で検討してきた。担当理事より、来年春から実施するためには早めに実施案を決定する必要があるとの意見が出された。改善方向では合意が得られているが、従来形態の発表を希望する会員の発表機会をどの程度確保すべきかにつき意見が交わされた。

オ 会誌(「天気」)の広告掲載料値上げについて

「天気」の広告代理店によると、広告掲載料は現在6.5万円/頁であり、類似の他の学会会誌と比べて安いので、1万円程度値上げするのが適当との話があった旨、事務局から紹介があった。値上げによる収支の見通し等の資料が不足であり、次回常任理事会までに資料をそろえて検討することとなった。

### 1996年度山本・正野論文賞の受賞者決まる

**受賞者:** 謝 尚平 (北海道大学大学院地球環境科学研究科)

**対象論文:** A coupled ocean-atmosphere model of relevance to the ITCZ in the Eastern Pacific. Tellus, 46A, (1994), 340-350. (with S. G. H. Philander)

**選定理由:** 太陽放射による加熱の中心が季節的に南半球、北半球を移動するにも係わらず、東太平洋並びに大西洋の熱帯収束帯は一年を通じて北半球に存在する。そして、その位置は東西に延びる海面水温の高い帯に対応している。他方、南半球の同じ緯度帯では海面水温は低く、海面水温場にも南北非対称性が見られる。北半球のみにITCZがあるということ自体は海岸線の傾きとか大陸分布の南北非対称性によるのであろうと考えられてきたが、何故に、大気海洋両方にこのような非対称性が現れるのかという点についての明快な説明はこれまで与えられてこなかった。

謝尚平会員は、風の収束場と海面水温の両方に現れるこの非対称性は大気海洋間の相互作用の結果であろうと考え、南北対称な外部強制下での南北対称なITCZが安定であるかどうかを東西一様な簡略化された大気海洋結合モデルで調べた。ここで導入された大気海洋相互作用は、風が強いところでは、潜熱を奪わ

れること並びに海洋表層での鉛直混合により海面水温が低下し、他方、海面水温が高いところでは、積雲が立ち、大気風の場が収束するというものである。東太平洋並びに大西洋の赤道上の海面水温は赤道湧昇の影響により低いので、海面水温と大気の収束場の対応で考えれば、南北対称な場では、ITCZは両半球に生じる。しかし、少しでも南半球の海面水温が低下すれば、南半球のITCZ上でも北半球のITCZに向かう南東風が吹く。この風により南半球の海面水温はさらに低下し、最終的には南半球のITCZは消滅する。このようにして、大気海洋両方に現れる非対称性は両者の結合不安定の結果として解釈される。

大気の平均的構造は、海面、陸面の境界条件を与えれば再現できる。しかし気候という観点からは、両者の結合系としての振る舞いを解明しなければ判ったことにはならない。当該論文は熱帯収束帯の南北非対称性という大気的基本的構造もまた、大気海洋間の相互作用の結果として理解されうることを非常に単純なモデルで示し、気候力学研究の一つの新しい方向を与えたものとして大変高く評価できる。よって、日本気象学会は本論文に対し、今年度の山本・正野論文賞を贈るものである。